

# 墓郷形成の前提 大和・結崎墓地の周辺

今尾文昭

Preconditions for the Formation of Graveyard Villages: around the Yuzaki Graveyard in Yamato

はじめに

- ①斑鳩・極楽寺墓地と墓郷集団
- ②中世結崎の範囲と結崎墓地の墓郷集団
- ③寺川の付け替えと結崎墓地の墓郷集団
- ④結崎墓地の計画的配置の可能性  
おわりに

## 【論文要旨】

奈良盆地の郷墓が、近世以前の墓地に遡源することは多く指摘されるところである。郷墓の経営は複数の村で構成された墓郷によって行われるが、その枠組みと水郷・山郷・宮郷あるいは国人郷との関連が説かれている。しかし、こういったさまざまな地域的、歴史的枠組みが現実にはそのまま墓郷の枠組みに適用できない場合が多い。実際の墓郷の形成過程には多様な状況があり、それが作用したことに原因があると考えられる。墓郷形成の前提、過程を個別に検討して、今後の類型化に備えることが目下の課題であろう。

一例として奈良盆地のほぼ中央に位置する磯城郡川西町結崎墓地の墓郷に注目した。結崎墓地の墓郷は寺川を挟んだ広域な範囲に及び、大和でも最大級の規模となっている。まず文献史料から中世後半期における結崎の範囲の復元に努め、現在の墓郷範囲にほぼ重複することを指摘した。つまり墓郷集団の地域的枠組みが、一三世紀後葉以前に存在した可能性を示した。次にこの地域的枠組みの実態を示す歴史的事業として、寺川の付け替えについて言及した。寺川は結崎付近では、古代道路の筋違道(太子道)に重なる直線の流路となっている。近年の考古学調査で、その旧流路と推断できる河道の検出がなされたことと、現地形観察から旧流路を推定復元した。文献史料も援用

して付け替え時期を一二世紀後葉から一三世紀中葉にあると推測した。寺川の付け替え事業は治水、灌漑、耕地、交通の再編成を企図したものであったと推察されるが、地域の拠点施設に変革をもたらしたことも想像に難くない。もちろん墓郷集団の先駆ともいべき集団は、その渦中にあった。

次に結崎墓地の地理上の位置について検討した。(1)大和の広域条里地割の施工域の周縁にある。(2)この広域条里地割施工域の周縁が生み出されたことと、寺川の付け替え事業に関連性がある。(3)結崎墓地を通る南北方向の同一軸線上(磯城郡、平群郡の条里坪境界に相当)に信仰、交通上の要衝施設を見いだすことができる。すなわち、北に向かつて結崎墓地―梅戸橋(もとの結崎寺、寺川の渡河点カ)―板屋ヶ瀬橋(大和川の渡河点)―阿土墓地―良福寺の計画的配置がある。(4)これらは、律宗の活動拠点として史料にみえる。

結崎墓地の墓郷の地域的枠組みが一三世紀代に形成されたこと、郷墓に計画的配置されたものがある可能性、墓郷範囲を越えた広域な範囲を対象とした土地用途の吟味、選択のなかでそれが実行された可能性、結崎墓地の墓郷集団の形成過程に律宗の活動が関与したことなどを指摘した。

## はじめに

かつて、郷墓の形成過程を歴史地理学の立場から分析、検討した野崎清孝氏<sup>①</sup>は郷墓の地域的枠組を墓郷集団と呼ばれた。奈良盆地内の主要な郷墓三四ヶ所をあげて、その範囲、規模、宗旨、戦国期の国人郷の勢力圏、水郷・宮郷・山郷との関連性などから、墓郷集団の歴史的基盤とその意義を明らかにしようとされた。古代の「和名抄郷」との関連性については言及を措くことを表明されたが、組上にあげられた文献史料から時期上の照準を近世以前の中世後半期におかれたことは、明らかである。論文の発表は一九七三年のことであるから、往時、一部の例外的な調査を除くと考古学による中世後半期の遺跡の発掘調査は、奈良盆地の条里制施工域においてほとんどなされていない状況にあった。したがって、この論文に考古学成果がとり込まれた様子はうかがえない。一九八〇年代以降は奈良県内にあっても、中世考古資料が飛躍的に増したことは言うに及ばない。そこで今日、多少の考古資料を援用しながら改めて野崎氏が提起した墓郷集団について一考するの興味のあることだろう。

各墓郷が形成された前提には幾つかの契機が存在すること、形成に至る歴史過程も一様でないものと私はとらえているが、個別の郷墓、墓郷集団の分析を多く進めることが、当面、求められる課題であり、しかるのちに郷墓、墓郷集団に通底するものを抽出することが肝要であると考ええる。

前稿では斑鳩・極楽寺墓地をとりあげたが、この墓郷の形成と同様の歴史過程を経て大規模な郷墓が経営されるに至った可能性が高い例として、磯城郡川西町に所在の結崎墓地がある。結崎墓地そのものに対する発掘調査はなされていないが、周辺の地理的、歴史的環境、そして周辺の発掘調査例をもとにその墓郷集団形成の前提について考える。まず結

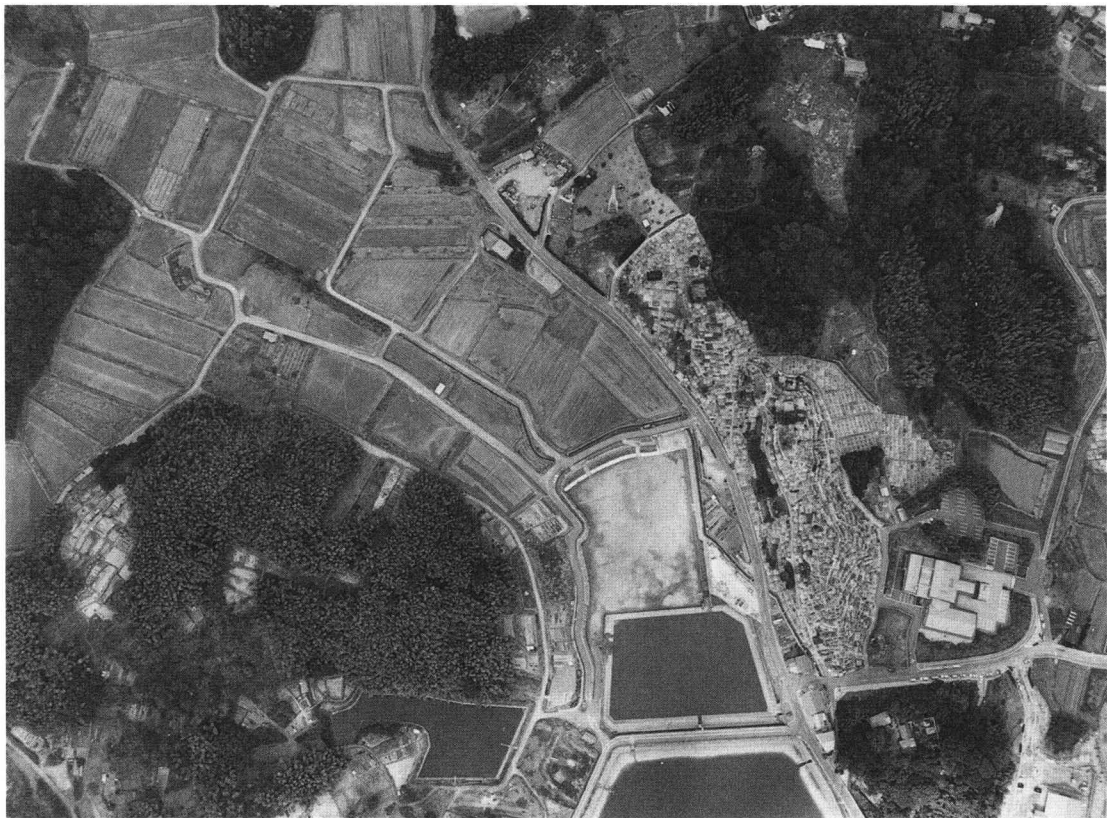


図1 斑鳩極楽寺墓地（直上 写真上方が北 2000年2月16日撮影）

崎墓地と対比する意味で斑鳩・極楽寺墓地について再び、ふれることから始めたい。

## ① 斑鳩・極楽寺墓地と墓郷集団

### (1) 仏塚古墳における「供養」

さきに私は、現行九ヶ大字にまたがる郷墓である斑鳩・極楽寺墓地の形成過程に、至近に所在する仏塚古墳において中世におこなわれた「供養」が関係するのではないかと主張した<sup>(2)</sup>。仏塚古墳は横穴式石室を備えた後期古墳だが、中世時期の墓室の再利用が発掘調査によって確認されている。出土の中世遺物の構成と帰属時期の再検討から一二世紀後葉前後に始まる「供養」第一期と一四世紀末葉から一五世紀前葉の「供養」第二期に区分できることを指摘した。「供養」第一期は瓦器碗、土師皿を用いた燃燈供養を中心とした仏事、「供養」第二期は本尊の奉前に密教的要素の濃い莊嚴が整えられて、いわゆる華、香、飲食、燈供養が催行されたものと推測した。

「供養」第二期の供養具は瓦製作技法との共通性の高い瓦質製品を主としながらも、土師器、古瀬戸、一部に金属器をよりよく写した瓦質製品などがそれぞれ補完する形で揃えられている。供養具の調達、整備にあたっては法隆寺が直接関与した事業というよりも、いわば近在各方面からの発注や持ちよりによったことを窺わせるものであった。

仏塚古墳出土の供養具をいま聖霊院にある教仏が施入の一三〇二年の乾元元年銘華瓶、また舍利殿の一三六六年の貞治五年銘火舎と華瓶、六器といった鑄造の金銅製の法隆寺伝来の法具、供養具類に比較した時に、そこに表徴された階層的差異には歴然としたものがある。一四世紀以降、法隆寺では、密教の浸透と法具類の整備がなされたとされるが、それはまた一二七一年（文永八）に円覚上人導御によってはじめられる東院逆

修、一二八八年（正応元）から一三〇二年（乾元元）にかけて活躍した勸進聖教仏によつてはじめられた北室光明真言会といった法隆寺内での逆修、追善供養の催行に連動したものであろう。そして、仏塚古墳の「供養」第一期の意義をこういった法隆寺内の動向が寺辺に及んだものとみなした。これは当然ながら階層的な拡大を背景に行われたことである。「供養」を維持した主体は法隆寺郷にあり、それを構成する郷民各層にあったものと考えた。もちろん民衆教化の側面からみると、細川涼一氏によつて具体像が明らかにされた寺辺律僧と称される宗教者の活発な活動がある<sup>(3)</sup>。直接の史料は呈示できないながら、極楽寺律僧の主導による仏塚古墳の「供養」が行われたものと推察する。

仏塚古墳の「供養」第二期の終焉は、供養具のなかで一段と下降する時期の製作になる瓦質華瓶が示す一五世紀後葉にあると思われる。一方、仏塚古墳での事情に同調するかに斑鳩・極楽寺墓地では一五二一年（永正一八）の一結衆による地藏石仏造立を嚆矢として、講衆による名号碑の造立がはじまる。仏塚古墳での「供養」はその前提としての歴史の意味が付与され、一六世紀前半にはこれに替わった可能性が示唆されるのである。石塔が林立した景観形成に至る斑鳩・極楽寺墓地の郷墓化は、この一六世紀代以降に確立する可能性が濃厚だが、仏塚古墳の「供養」はその前提、過程にある。

### (2) 墓郷形成の各様——柳本墓地の場合

さて、野崎氏の分析、検討によれば水郷、山郷、宮郷と墓郷の地域的範囲がほぼ一致するタイプと両者が齟齬をきたすタイプに区分できるといふ。前者は既成の歴史的地域を踏襲した枠組みであり、後者はそれに反した新たな秩序の存在により創出されたもので、具体的には衆徒・国民の勢力圏としての郷の「遺構」ではないかとした。その後、戦国末期の国人郷と現行の墓郷の範囲が一致しないことを千田嘉博氏らが指摘し

たところだが、筒井・越智・十市・箸尾・古市の広域支配が確立される以前の国人層の支配領域と現行の墓郷に関係性がないものかどうかは、なお検討すべき課題であろう。野崎氏の区分はいまも有効な分析方法を示したものだと思えるが、実態は複雑である。

たとえば『多聞院日記』によると、十市氏に血縁関係をもつ多聞院英俊は、一五七〇年（元亀元）に「釜口ノハカ」、一五七七年（天正五）に「釜口ハカ」、一五八四年（天正一二）に「地藏院ノハカ」への墓参がみえる。幡鎌一弘氏はこの「ハカ」を、ほぼ現行の磯城郡天理市柳本墓地のことであると指摘している。<sup>(5)</sup>多聞院英俊の里元との関係や、近縁者との関係を考証する必要もあるが、ひとまずこの記事を十市氏による国人郷である十市郷の範囲拡大に相俟つて、既往の楊本衆による共同墓地への十市氏関係者の関与の実態を示したものであると認識しておきたい。

楊本衆の基盤地域は楊本庄ということになるが、一五世紀後半の荘園の範囲と荘園管理、経営にかかわる諸施設の具体的位置については、『大乘院寺社雑事記』文明一七年（二四八五）九月二六日条にあらわされた挿図により知ることができる。楊本庄は興福寺大乘院の根本所領の筆頭にあげられており、記事の頻度も高い。参看するに、ほかに荘園内の水利、山林管理に関連した記述もある。一帯の水郷、山郷集団の形成の前提に、楊本庄の存在があったことが示唆される。ついでには、墓郷集団の地域的枠組みの形成とこの楊本庄の庄域、経営は無関係とは言えないのである。

柳本墓地に関する情報を提供する発掘調査が天理市教育委員会によってなされている。調査では一三〜一六世紀代の鍛冶炉やそれともなう焼土、排水施設などの検出があり、調査者の青木勘時氏は長岳寺麾下の職人集団の実態を示す資料であると評価された。<sup>(6)</sup>調査地は長岳寺大門（肘切門）の西南に隣接しており、調査者が述べるとおり中世寺院の門

前の経営を知る稀少な例といえる。ここはまた現行の柳本墓地からみると、西北隣接地にあつて立地の丘陵の先端方向にあたる。調査地南半では中世墓二基の検出があり、詳細は不明ながら土葬墓とみられる。一六世紀後葉〜末葉に人為的に埋められた工房施設の円形土坑（水溜井戸）の埋土からは、いわゆる箱仏が二基、出土している。墓地に立てられていたものである。鍛冶工房と墓地との境界関係は、検出遺構のなかでは必ずしも明示できないようであるが、鍛冶工房と墓地の営みが時期的に重複することは確実であろう。両者は近接して、同時に存在した。このように国人郷としての十市郷が周辺に関係してくる以前、少なくとも中世後半期に柳本墓地は、楊本庄内の東北部分の一隅を占めたものとして成立しており、これは楊本衆による庄園の維持、経営と不可分のものであると推測される。してみると、中世の柳本墓地は時期や供養の内容によって時に異なる様相を示す。つまり野崎氏が指摘のふたつのタイプのどちらの側面をも合わせもつのである。

### （3）斑鳩・極楽寺墓地と中世法隆寺郷

もとにかく前稿では斑鳩・極楽寺墓地の墓郷集団の歴史的、地域的枠組が中世後半期の法隆寺郷にあるとする点は、あらかじめ概ね了解されたものと判断して論述した。この点について以下にすこしふれておこう。

『嘉元記』によると一三二〇年（延慶三）に法隆寺の子院蓮生院に侵入した強盗に対して、寺は法隆寺・龍田・五百井・服部・丹後・神南・目安・吉田・富河・笠目・阿波・神屋・幸前・三井・興留・安堵・岡崎の計一七カ村に廻状して落書的方式で犯人の捜索が行われた。現行の斑鳩・極楽寺墓地の墓郷は、ほぼここにあらわれた村々によって構成されている。ただ高安のみここにあらがない。一方、『斑鳩古寺便覧』によると、文禄年間（一五九二〜一五九六年）までは「十八郷此来」とあり、

極楽寺墓地を墓所としていたことがみえる。すでに指摘されているとおり、この範囲は上記の村々に重なるものと推察される。つまり中世後期を通じてこの地理的枠組みが維持された可能性が高いのである。そればかりか犯人の処刑の場が極楽寺にあったことは、法隆寺郷に共有された刑場としてすでに一四世紀初葉には極楽寺の場があったことを示すものとみてよいと判断した。それを敷衍して仏塚古墳の「供養」主体者とその地域を上述の法隆寺郷にあるとした。そして、前稿では墓郷集団形成の前提となった法隆寺郷の郷民の実際の姿について考古資料を用いた描写を試みた。

前置きが長くなったが、一四世紀初葉にはすでに現行の墓郷の地域的枠組みが成立していたのは、個別、この斑鳩・極楽寺墓地に特化されることなのか。法隆寺と寺辺に存在した法隆寺郷という特異な事情のなかに起因した現象として限定できるものだろうか。国人郷に先立つ地域的枠組みの形成契機にも当然ながら歴史的意味がある。次節には一見すると斑鳩・極楽寺墓地と同様の歴史過程を経たと思われる磯城郡川西町結崎墓地の墓郷集団をとりあげて、上記の問題を考えるひとつの手がかりとした。

## ②中世結崎の範囲と結崎墓地の墓郷集団

### (1) 中世結崎の範囲を示す史料

結崎墓地の墓郷は、結崎・唐院・保田・小柳・屏風・三河・伴堂・但馬・黒田の九ヶ大字に及ぶ。東西三・五km、南北三km、奈良盆地中央部の磯城郡川西町、三宅町、田原本町の現行三町にまたがる広大な範囲にあり、最大規模の墓郷のひとつである。野崎氏は、結崎宮を精神的紐帯とする結崎郷の郷民を墓郷集団の経営主体とみなされており、当然ながらさきの区分では前者のタイプに含まれる。

ここで問題とするのは、中世結崎の範囲と上記の現行結崎墓地の墓郷集団の関係性である。現在の大字結崎は、中村・市場・辻・井戸・出屋敷の五垣内からなり寺川右岸にとどまるが、中世後半期の結崎はもつと広域の地名として認識される<sup>8)</sup>。条里制による坪の明示により結崎の地名を比定できる文書史料を以下にまとめた。結崎は複合表記の地名としてでっており、坪固有名の上に冠せられた広域の地名として用いられていたと考えて間違いないだろう。

○ 一二八〇年(弘安三)、城下郡路西一条三里七坪が「ユウサキ」とある(『鎌倉遺文』一四一四六)。寺川右岸。川西町大字結崎の小字鎌田に該当する。結崎の中村、辻垣内の東側に位置する。

○ 一二九四年(永仁二)、城下郡路西一条五里二坪が「夕崎字土々呂器」とある(『大佛燈油料田記録』)。寺川左岸。川西町大字唐院の小字六ツ井田に該当する。

○ 一二八八年(正応元)、城下郡路西一条三里一坪が「字結崎率堵婆、屋地」とある(『西大寺田園目録』)。寺川左岸。三宅町大字屏風の小事麻部に該当する。小事境界の南側は一二条と一二条の条界に相当しているが、他は条里地割の遺存を観察できない。とくに西側は筋違道に接する。

○ 一二三〇年(寛喜二)、城下郡路西一条三里一〇坪が「遊崎字抜田樋尻」とある(『澤氏古文書』)。寺川左岸。三宅町大字伴堂小字北池田に相当する。

○ 一二五六年(建長八)、城下郡路西一条三里一坪が「ユウサキ字平田」とある(『鎌倉遺文』七九八八)。三宅町大字伴堂小字西口に相当する。東側は筋違道に至近する。

このように中世結崎の地名は、寺川の両岸、現在の結崎、唐院、屏風、伴堂に広がる広域地名としてとらえておく必要がある。坪の明示がなく、具体的に現行のどの場所か不明ながら『澤氏古文書』一二三〇年(寛喜



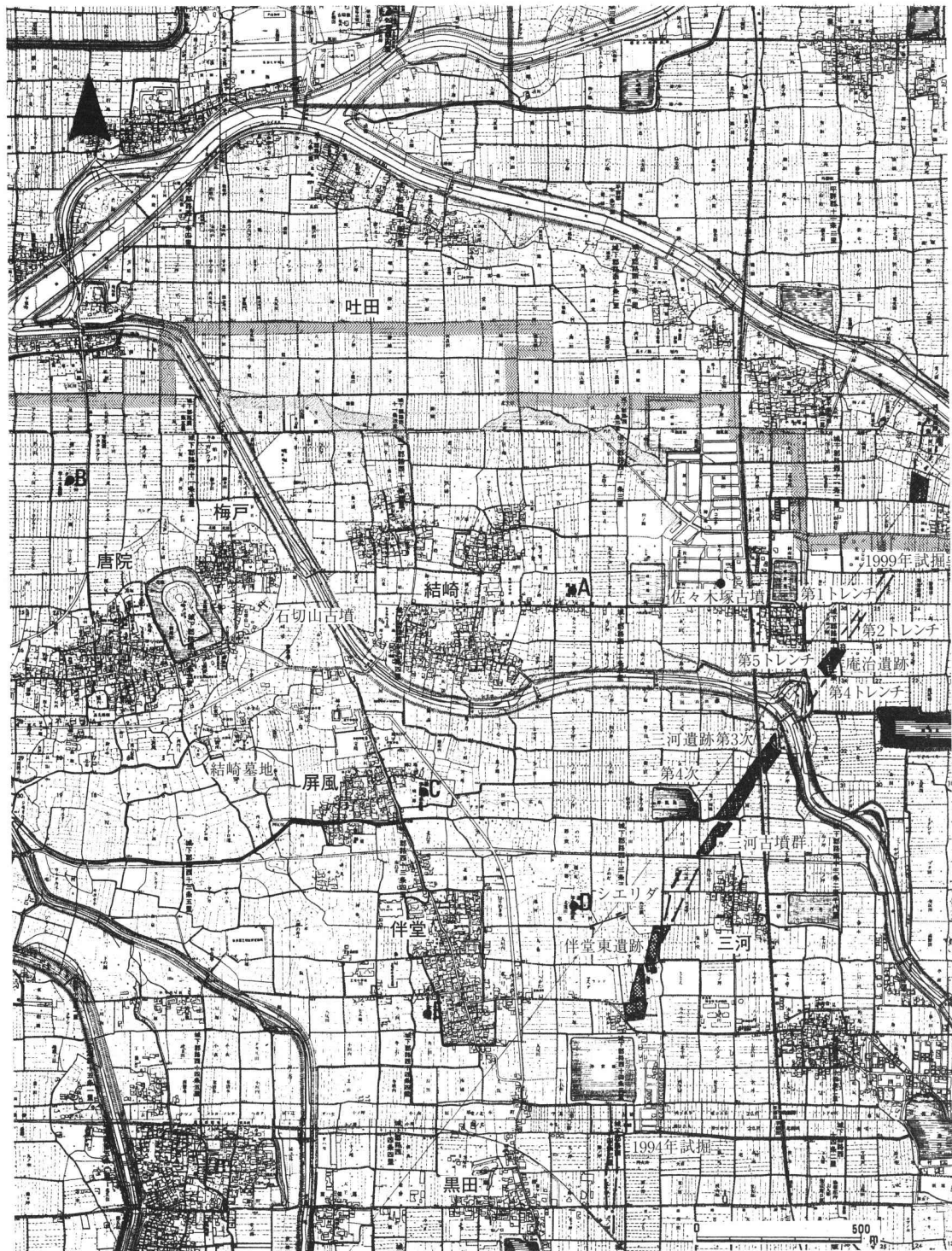


図2 結崎関連調査地と関連小字図（下図は奈良県立橿原考古学研究所編『大和国条里復原図』奈良県教育委員会 1980年による。縮尺1/20000）  
山形のスクリーントーンは吐田、下永との境界。南側の大字の多くが結崎墓地の墓郷を構成。  
砂目のスクリーントーンは寺川旧流路の地割痕跡を示す。  
A ユウサキ B タ崎字土々呂器 C 字結崎率堵婆、屋地 D 遊崎字抜田樋尻  
E ユウサキ字平田

二)の「處分田畠等事」には、「遊崎字鶴王木」・「遊崎字斎太作」・「字的場垣内 遊崎」の記述がある。また、『大乘院寺社雜事記』康正三年(二四五七)五月一二日条にみえる佐竹庄に「イウサキノ内」と注しているし、『川西町史』には『尋尊大僧正記』応仁二年(一四六八)一〇月二日条の反錢を徴した庄々のうち「狭竹庄」があり、細字で「結崎」と肩書きしており狭竹庄がやはり結崎のうちにあったことを示す。ほかに『大乘院寺社雜事記』寛正四年(一四六三)三月一日条に「二石八斗 池尻庄、唐院沙汰」とあり、「唐院」もまた「チウサキ(イウサキ)」のうちにあったことがわかる。

## (2) 「殺生禁断」対象地域と中世結崎

『感身学正記』寛元二年(一二四四)二月二五日に「今里野」に飯屋を構えて諸宿の文殊惣供養を遂げた叡尊は翌二六日に、忍性の亡母一三回忌の追善のために「結崎の屏風」に移住している。忍性の生誕地の「屏風」もまた「結崎」のうちにあった。ここでは、在地有力者とみられる「十郎入道」をはじめ諸人は「四郷」の殺生禁断を誓約する。殺生禁断の範囲が「四郷」とあるのは、「結崎」が広域で、「四郷」によるひとまとまりの地域(上記の「ユウサキ」、「夕崎」、「遊崎」が現在の結崎・唐院・屏風・伴堂の丁度、四地域に冠されているのはこの「四郷」を考える際に参考にしたい。偶然ではなく、中世後半期の結崎がこの四小地域で構成されていたことを示す可能性も追究する必要がある)であったことに由来すると考えるがいかがであろうか。

さて、これらの史料にみえる中世結崎の範囲であるが、現行の結崎墓地の墓郷の各大字の範囲にはほぼ重複する。ここはひとまず墓郷集団の地域的枠組みが一三世紀後葉以前に遡上する可能性を示唆する史料であると受けとめておきたい。もつともこれだけでは、戦国期、近世、近代を経てもなお今日に及ぶ地域的紐帯について具体的に解明したことにはな

らない。そこで次節では、結崎墓地の墓郷集団の前提となる地域的枠組みも関与するなかで形成、維持されたと思われる歴史事業について追究する。

## ③ 寺川の付け替えと結崎墓地の墓郷集団

### (1) 諸河川の歴史性をめぐって

結崎墓地の墓郷がどうして寺川を越えて拡がっているのか。かねてより疑問を感じていた。斑鳩・極楽寺墓地の墓郷も、富雄川の東西に拡がっている。もつとも、富雄川においては時期不明ながら付け替え事業があったとみられ、今日の岡崎川の流路がその旧流路にあたるものではないかといわれている。<sup>(9)</sup> そうであれば、斑鳩・極楽寺墓地の墓郷は富雄川左岸にまとまることになる。一方、斑鳩・極楽寺墓地の東方にある生駒郡安堵町の阿土墓地は、大和川を挟んだ対岸にある大字吐田を墓郷のうちに含んでおり、この場合は川を挟んで墓郷が形成された例ということになる。さまざまな場合があつて、これを逐一、疑問とするに値しないことかもしれない。とはいえ、現・寺川は結崎あたりでは城下郡路西一二条二里、三里の北半を西流し、現・糸井神社のところで屈曲したのち北行しては筋違道(太子道)に重複の直線流路として北西流するわけだから、さきの富雄川と同様、いつの時点かに人工の制禦が加えられたことに疑念を挟む余地はない。墓郷の形成にそれが影響を及ぼしていることは、考えられないか。

奈良盆地の河川の歴史性については、秋山日出雄・中井一夫・宮本誠<sup>(10)</sup>ら諸氏の先行研究がある。まず秋山氏は飛鳥川・葛城川に人工制禦を認め、律令国家の勸農政策の一環として平安初期の弘仁・天長期(八一〇(八三四年)の開削、付け替えを主張した。一方、寺川についてはさらに遡る七世紀前半の人工河川化の可能性に言及する。これは、多分に

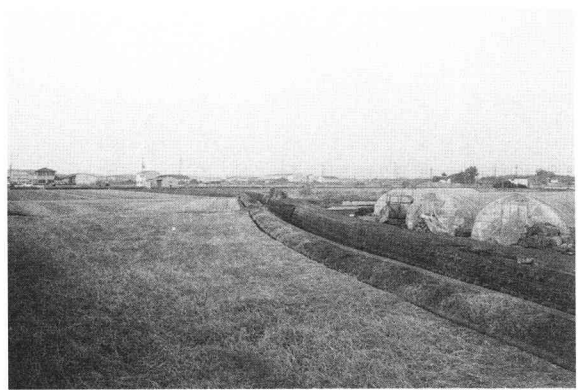


図3 寺川旧流路推定地域の現況(2003年1月14日筆者撮影)

が、河川の付け替えを多角的に、構造的な歴史事業としてとらえたものであり、炯眼である。その後、松浦茂樹氏も土木工学の観点から大和川水系の諸河川の多くが、条里地割に一致した直線の流路であり、自然地形に反した人為的な河川形態であると指摘した上で、諸河川の開削契機を条里地割の施工と関連づけて理解しようとした。<sup>(13)</sup>

考古学の発掘調査成果にもとづいて奈良盆地の旧河川の埋没時期を示したのは、中井一夫氏である。北葛城郡広陵町箸尾遺跡、橿原市土橋遺跡の旧河川検出例をあげて、これらは幅三〇〇～五〇〇mにおよぶ間を浸蝕作用を繰り返しながら流れていたとする。そして河川内堆積砂に含まれた遺物の年代を検討されて、その埋没時期を一二世紀代にあると見解された。なお盆地南部では、平安前期に埋没する河川が磯城郡田原本町十六面・薬王寺遺跡で確認されている。<sup>(14)</sup>

ところで中井氏は弥生遺跡の集落群の把握のための基礎作業を研究の

『日本書紀』斉明二年の「狂心渠」の記事を寺川に対する河川事業について述べているとみなしてのことである。さらには下ッ道に即して流下する横大路以北の寺川の付け替え、開削時期が大和の現行の広域条里の施工時期の上限を決定するものとした。そして河川の付け替えを灌漑水路としての機能面ばかりではなく、水上交通路の整備面にもいち早く着目した。このことは次章に触れることになる

出発点とされたが、現行河川と異なる旧河川が一二世紀代まで存続していたという指摘は、条里地割の広域化の時期を考える上でも示唆深いものとなった。また現行条里地割の乱れから、旧河川の抽出、流路復元を試みている。結崎に関しては、「唐院の集落の東部・島ノ山古墳東部の水田地帯」、「伴堂集落の東北部の水田地帯」、「石見池の形ならびにこれの北側の地域」に断続的な条里地割の乱れを指摘され、ついでこれらをつないで北西―南東方向の旧河川の流路復元案を示された。

仮に上記の旧河川が恒常的に古代以来、中世後半期まで機能していたものだとすると、結崎墓地の墓郷集団の前提となる地域的枠組みを考えるうえに看過できない。のちほど改めてふれるが、私は中世前半期の寺川の恒常的な流路は、現・寺川の北方域にあり、発掘調査によって中井一夫氏の流路復元案の南北で実際に検出された旧流路は幾度かの洪水の痕跡(結果として、古代以前の旧流路を再現する形で流下したのではないかと考える。これはここで主張の寺川の付け替え事業によって、引き起こされた事態である可能性も追究されなければならない)ではないかと考える。屏風・梅戸・唐院・保田に関係する「名号水請堤」が設置されているのも、このような一時的な出水に備えてのことであるのは言うまでもない。

次に農業技術史の観点から宮本誠氏は考古学調査、および文献史料にみえる「河成」表記に注意され、条里地割が施工されたのちの一二世紀を中心に河川の付け替えがあったとされた。そしてこの付け替え後の河川、すなわち現行河川の特徴として集水区域と灌漑区域が重複しない点に着目する。それは灌漑と集水の反復利用が可能となり、用水不足の地域にとってはその確保上、格好の形態であり土地の集約化を高めるものになったと言う。ついで河川の付け替えは灌漑を重視したものであったとみる。これも後段ふれるが、条里水田の広域化、結崎墓地が条里地割施工域の周縁に営まれたことと関連づく重要な指摘であると考ええる。



## (2) 寺川の付け替えをめぐる考古学調査

結崎墓地の墓郷に含まれる範囲は、整然と営まれた条里型水田が村々の間にひろがる。奈良盆地の田園風景の典型ともいえる地域である。もともとも一九九〇年代以降、中世結崎の一带を含んで盆地を南北に縦断する「京奈和自動車道」の建設計画が本格始動したことにより、その地域的特色を大きく変貌させる可能性がでてきた。発掘調査もこの建設にともなう事前緊急調査として、急速に進められている。結崎墓地の墓郷形成の前提を検討する上に必要な考古学情報もそのようななかで蓄積されてきた。本節では近年の考古学成果をもとに、前章に推断した中世結崎の範囲における歴史的、地理的環境の復元と寺川の付け替え時期について考える。便宜上、発掘調査によって得られた成果を(1)河川、(2)集落、(3)耕地、(4)古墳に分けてそれぞれまとめることとした。

## (1) 河川

中世結崎の範囲における旧河川の確認は、概ね五ヶ所に分かれる。旧河川の検出は、「京奈和自動車道」予定地内の遺跡有無、密度を確認するための試掘調査時に明らかにされることが多く、通常、河川の確認箇所は本調査対象外とする行政上の判断がとられるため、計画道路の幅員両側に設けられた幅四mの試掘トレンチにおける調査時の所見のみで完了とされる。従って旧河川の規模、埋没時期の確定、流路の方向、人為の程度の把握などに不十分な点もあり、それらを勘案した上で評価しなければならぬ。なお諸事例は調査の進捗にしたがって南側から記した。

A 伴堂池南側 磯城郡三宅町伴堂池のすぐ南側につづく三枚の水田下の試掘調査で、旧河川の確認があった。<sup>(15)</sup> 磯城郡路西一四条三里五坪(小字五ノ坪)、同四坪(小字四ノ坪)、同三坪(小字石橋)に該当する。現行小字名が条里制にもとづく坪付の数詞によることでもわかるように、条里型地割を示す水田下に確認された。範囲内で南東―北西方向の少なくとも四本の旧河川が存在した(一九九四年度試掘調査第二―七トレン

チ)。第Ⅱ層とされた現水田の床土直下に検出しており、いずれからも遺物の出土はないと報告されている。

B 伴堂池と屏風池の間 伴堂池から北側にかけての水田三枚分程度が、大規模な集落遺跡になることが判明した。伴堂東遺跡である。その北側二枚分の水田下に旧河川が存在した。<sup>(16)</sup> ここは伴堂池と屏風池のほぼ中間にあたる。また伴堂東遺跡と埋没古墳群のある三河遺跡の間に位置する。条里坪付による呼称では、城下郡路西一三条二里二七坪(小字コモラ)、同二六坪(小字六反田)に該当する。南東―北西方向の旧河川と東西方向の旧河川が確認された(一九九四年度試掘調査第一〇・一二トレンチ)。試掘調査第一〇トレンチ中央では、第Ⅱ層以下に砂礫の堆積が顕著であるという。出土遺物の報告はない。

C 寺川南側 現在の寺川のすぐ南側でも旧河川の確認がある(三河遺跡第三次調査<sup>(17)</sup>)。城下郡路西一二条二里九坪(小字北の坪)に調査区が設定され、幅約五mの南東―北西方向の流路(SR01)の検出があった。三五〇〇mある調査区の北端にあたり、もともと寺川に至近する位置にある。流路内からの遺物の出土はなく、直接に時期を知ることができないが、断面観察から一五―一六世紀代の第三水田面を検出した層位(第六層)に先行すると報告された。次に説明する寺川北側では、近世の流路の検出があった。現寺川の流路の固定化は、さらに時代を降ることになると思われるが、とりあえず現寺川の南北に流路が見いだされており、南側のものは一五世紀以前には存在したということになる。

D 寺川北側 現在の寺川のすぐ北側の城下郡路西一二条二里三坪(小字ナシメ)では、少なくとも二本以上の旧河川がある(一九九九年試掘調査第五トレンチ<sup>(18)</sup>)。図上計測でひとつが幅約一二m、あとひとつが幅約八mである。北西から西へと流路を変化させている。現・寺川も丁度、このあたりで屈曲するが検出の旧河川もそれに対応する状況にある。流路内からは近世陶磁器片の出土がある。寺川の流路が固定した

時期を推測する資料となるだろうと報告された。

E 寺川と大和川（初瀬川）の間 D地点の北東側では地山が上昇し、庵治遺跡が営まれる。さらに北東の城下郡路西一二条一里三六坪（小字南角田）で二本、つづいて北西の路西一二条一里三〇坪（小字北之町）で数本の旧河川が存在した（一九九九年試掘調査第二トレンチ、第一トレンチ東<sup>19</sup>）。現行は広域に条里型水田が展開する。さて三六坪（第二トレンチ）では河川堆積による不安定な砂質土が全体にみられ、確認の二本の旧河川はそれをベースとした南東—北西方向の流路である。図上計測でひとつは幅約二m、あとひとつは幅約四mである。旧河川の検出面で六世紀末—七世紀の須恵器杯が出土している。砂層ベースは次の三〇坪（第一トレンチ）につづくが、トレンチ南端では微高地となる。NR01はこの縁辺を北流する旧河川である。幅二七mに及んだが、最終的には幅八mに狭まると報告された。最終流路内からは、弥生時代中期の土器片が出土している。報告ではこの土器片により時期認定が計られているようだが、報告者が記すように細片で磨滅した土器片であり、時期はこの限りではないと考える。なおさらに北側に三本の流路が確認されている。幅一・二—一・九m、深さ六〇cmで、トレンチ内では完掘されたが出土遺物は皆無であった。

## (2) 集落

「京奈和自動車道」建設にともなう事前緊急発掘調査において集落に関連する遺構が確認されたのは、伴堂東遺跡である。磯城郡三宅町伴堂池を南端とし、それより北側一帯に拡がっている。現在の伴堂集落からは東方にあたることから新たに伴堂東遺跡と名付けられた。調査対象地北半を第一次調査として一九九五年度に、南半を第二次調査として一九九九年度にそれぞれ発掘調査された<sup>20</sup>。双方を合わせると調査面積は一〇〇〇m<sup>2</sup>を越す。第二次調査では、約七〇〇〇m<sup>2</sup>の調査でコンテナ約三六〇箱分にのぼる遺物が出土している。また、遺構密度も全体にわたっ

て高い。第一次調査地の基本土層は、褐色砂質土（耕作土）、オリープ褐色砂質土（床土）、灰褐色粘質土（包含層）、地表下三〇—四〇cmでいわゆる地山になる。地山は場所によって多少の異なりがある。暗褐色シルトを基調とし、中央部では黄褐色シルトおよび灰褐色砂質土、北部では黄褐色粘土によって構成される。第二次調査地では、第一次調査地につづく北端で、地表下約四〇cm、南端で地表下約一三〇cmに遺構面のベースとなる黄褐色粘土層の検出があった。旧河川検出(1)—E地点のような砂層ベースがみられない点は注意しておきたい。ただし、縄文晩期には幅四—一〇mの自然流路が存在する。それ以降は弥生時代前期の方形周溝墓、古墳時代前期を中心とする多数の土坑、飛鳥・奈良時代の建物群、平安時代後半の建物、溝、井戸、土坑などの確認がある。

なかでも第二次調査地で確認されたが、古墳時代後期になると一辺三五—五〇mの方形の区画溝が設けられて、なかに小規模の掘立柱建物が配置される状況にある。調査者の坂靖氏はこれを「先駆的な方形地割の土台」となったという。報告者の主張どおり一帯が他地域に先駆して集約性の高い土地利用が古墳時代後期以降になされたことを示す資料だと思われる。次に平安時代前半期の遺構は、明確でないものの後半期には再び状況を呈する。たとえば第一次調査地では、井戸SE一〇〇四から一一世紀前半の黒色土器碗の出土、土坑SK一〇〇七は黒色土器碗と瓦器碗が共存しており、一一世紀中葉の営みとみられる。さらに井戸SE一〇〇三からは一一世紀後半代の瓦器碗の出土が報告されている。なお、伴堂東遺跡北西約一〇〇mの小字シリエタでも一九九二年に調査<sup>21</sup>があり、その際に井戸SE一〇〇一の確認があり、一一世紀末—一二世紀代の瓦器碗が多量に出土した。すなわち伴堂東遺跡が北西にむかつて拡がりをもつことを示す。

なお先に触れた中井一夫氏が旧河川の流路痕跡とみなしたもののうちで、「伴堂集落の東北部の水田地帯」は、この伴堂東遺跡に該当するも

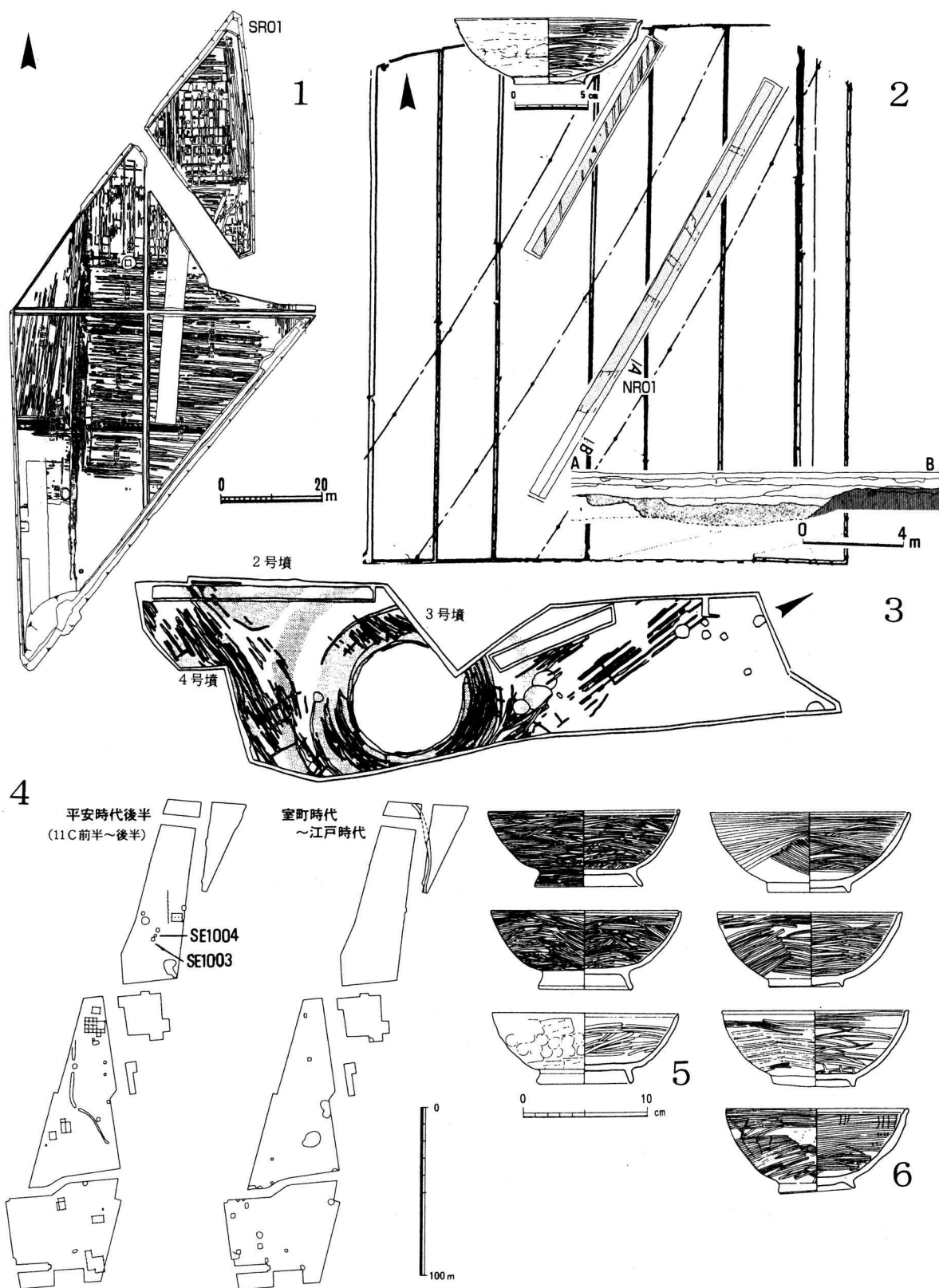


図4 結崎関連主要調査成果図 (各報告書による)

1. 三河遺跡第3次調査 (第3水田面—15～16世紀末ごろ、SR01は先行。縮尺1/1200)
2. 1999年度試掘調査第1トレンチ (縮尺1/1200)  
 左上—第1トレンチ西 素掘小溝出土瓦器椀 (縮尺1/4)  
 右下—第1トレンチ東 NR01 土層図 中央のくぼみは最終埋没土層
3. 三河3号墳と素掘小溝の状況 (縮尺1/1200)
4. 伴堂東遺跡主要遺構の変遷
5. 伴堂東遺跡第1次調査地 SE1004 出土黒色土器 (縮尺1/5)
6. 伴堂東遺跡第1次調査地 SE1003 出土瓦器椀 (縮尺1/5)

のと思われる。この部分での条里地割の乱れは、灌漑用水の充足との関連や集落立地との関連から広域な条里地割が施工され得ない範囲を示したものと理解するのが適当と考える。

このように伴堂東遺跡は各時代の集落遺跡としてとらえることができるが、鎌倉時代後半の一三世紀代になると調査地全体にわたって素掘小溝の営みが顕著となる。つまり集落から耕地へと土地利用を変化させたことがわかる。さらに素掘小溝自体も第二次調査第一トレンチでは、斜行方向から室町時代後半には広域条里方向に転換すると報告されている。土地利用が変化した事態につづいて耕地の地割に変化をきたしたことも注意される。ここではひとまず中世の伴堂東遺跡における土地利用の大きな転換が一三世紀代にあるとの見通しを得ることができた。

### (3) 耕地

調査の対象となった地域はくりかえしふれたように広域条里地割による水田がよく保持された一帯であり、ただ集落遺跡の伴堂東遺跡周辺に乱れが看取される程度である。一帯での中世の耕地の状況は、三河遺跡と庵治遺跡の調査例に示されている。

A 寺川南側 現・寺川の南側で旧河川が確認された三河遺跡第三次調査(調査面積三五〇〇m<sup>2</sup>)では、三時期にわたる水田面が確認された。<sup>(22)</sup>中世結崎の条里制の施工実態を知る稀少な調査事例となったが、それにとどまらず寺川の付け替え事業をさぐる情報も併せて提供された。基本土層は耕作土(第一層)の下位に近世から近代の水田耕作層(第二～五層)があり、さらに下に灰色粘土層(第六層)、青灰色ないしは褐灰色粘土層(第七層)、橙色粘質土層(第八層)、黒褐色粘土層(第九層)、黄褐色粘土層(第一〇層)、その下位が地山とされた青灰色粘土層(第十一層)となっており、古くからの河川作用による砂層形成がうかがえない箇所と思われる。

このうち第六層では、一五～一六世紀末頃に機能した第三水田面が検

出された。六枚の条里型水田と畦畔、畑および小区画水田、島畑、井戸、溜井、そしてさきほどふれた旧河川(SR01)によって構成される。ただしSR01は第三水田面の形成に先行すると報告されている。

第七層には第二水田面が検出された。同じく六枚の条里型水田と畦畔、水口、島畑、畑で構成されており、いずれも小片とされるが、水田面から一二～一三世紀の瓦器碗、土師器、水田面の上に盛られた島畑からは一四世紀末葉の瓦質摺鉢、ほかに黒色土器、瓦の出土がある。報告では第二水田面の機能時期を一二世紀初葉を上限に一四世紀後半までとし、周辺での一二世紀代の広域な条里型地割施工の可能性を示唆する。

第八層には第一水田面が検出された。八・二～三五・三mの大きさの五二枚の水田と畦畔、用水路と目される幅二・二～五m、幅二〇cmの溝がある。畦畔は北西―南東およびそれに直交する方向にある。水田面からは六世紀末葉～七世紀初葉の須恵器杯身、土師器甕の出土がある。第一水田面は古墳時代の水田である。さらに下位の第一〇層からは四本程度の旧河川ないしは溝の検出がある。うちSR04は直線溝で古墳時代前期の甕が出土している。

第二・三水田面は条里型水田であり、検出の坪境相当畦畔の交差点の南東が城下郡路西一二条二里八坪に、同じく北東が九坪、北西が一六坪、南西が一七坪にあたる。報告者の山田隆文氏は第二水田面では条里復元にはば見合う位置で、坪境となる東西方向の畦畔を検出したのに対して、時期が降る第三水田面ではこれがやや南にズレる点を指摘する。さらに第三水田面では水田の大きさに不統一性が認められ、畑地も増加する点を指摘した。そして当初、整然と施工された条里型水田が微妙な形状変化に至るのは、寺川の流路変化や土地所有の關係に変化があったのではないかとする。

こういった面的調査がなされて、寺川南側では条里型水田の広域化の形成が一二～一三世紀代にあるとされた点は意義深い。ただし一一世紀

初葉の黒色土器が、第二水田面で出土していることでもわかるように、周辺における土地利用は広域の条里施工に先行してなされているし、後述する三河遺跡第四次調査地で検出した一〇世紀前後の正方位をなす小溝の存在もあり、条里地割にもとづく開発は周辺では部分的、段階的に進行していたものと思われる。寺川の付け替え事業もこのような土地利用、経済的ストックがあったことを前提に企図されたものと考えるが、ともかく三河遺跡第三次調査により第二水田面形成時から第三水田面形成以前の間の一二〜一四世紀に、寺川の付け替え事業がなされ条里制施工域の農耕地の再編成がなされた可能性が示されたものと理解しておきたい。

B 寺川北側 現在の寺川の北側に所在の天理市庵治遺跡（調査面積三五〇〇㎡）では、縄文時代晩期の遺物包含層（黒褐色粘土層）、弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代前期の土坑、ピットとともに素掘小溝二二三条分が検出された。<sup>(23)</sup>ここは城下郡路西一二条一里三五坪（小字ロテン）、同一二条二里二坪（小字上クロノ坪）に該当する。寺川および大和川（初瀬川）の洪水が常態化する一帯とはいえ、条里型水田が広域に形成されている。調査報告にも常に湧水があったことが記されている。検出の素掘小溝は重複関係から三群に分別される。中央の一群が先行し、自然の屈曲を示すとされるが、なかにやや新しい溝として幅五〇cmのSD103の検出があり、これは条里の里界の想定線上にある。SD103の溝底からは破碎していたが、逆位の状態で配置された瓦器碗の出土があった。高台は退化傾向を示すが、なお復元口径一四・五cm、器高五・二cmの法量をもつ。一二世紀後葉に帰属するものである。素掘小溝群は乾田化にともなう農耕地での土地利用を示す遺構とみてよいだろうし、条里地割に則する溝が一二世紀後葉に時期的な定点を置く点に注意される。また、現在の寺川に至近しているにもかかわらず実際は洪水による遺構面の流失もなく、今日まで維持されてきた点も留意してお

きたい。これは庵治遺跡の調査範囲から北方が砂層ベースとなるのに比較して、ここでは基本土層が床土下は灰色粘質土層、黒褐色土層、黄色シルト層、黒褐色粘土層、黄褐色粘質土層と報告されていることからでもわかるように調査区以北とは様相を違えるのである。

#### C 寺川と大和川（初瀬川）の中間

庵治遺跡の北側は試掘調査のトレンチが設けられたところである。<sup>(24)</sup>すでに記したように旧河川の集中地帯であるし、ベースそのものが不安定な砂層となっている。そのうちの第一トレンチ西は城下郡路西一二条一里三〇坪（小字北之町）に設けられた。ここでは素掘小溝の検出があり、そのうちから高台断面が三角形、見込みに粗い連結輪状暗文を施した瓦器碗が出土している。庵治遺跡出土例と同様の一二世紀後葉に編年される資料である。

#### D 屏風池

三河遺跡第四次調査として実施された屏風池の堤体改修事業では、広域条里地割に即した素掘小溝が全般に認められた。<sup>(25)</sup>そのうち南側堤体下に検出の小溝の溝底に、正位置ではほぼ完形の瓦器碗が出土した。地鎮め行為など意図的に配置されたものと考えて差し支えない状態にあった。瓦器碗の帰属時期は一二世紀末葉に帰属する。広域条里地割による耕地形成の下限時期を示す資料と評価できる。

なお、屏風池東側の三河遺跡第一次調査地では、現行の坪（城下郡路西一二条二里一七・一八坪）の中間に条里方向の大溝SD01の検出がなされている。幅六・五m、深さ二〇cmの規模で、出土遺物から一二世紀代に設けられたとされた。報告者の坂靖氏は、条里型水田形成の際の施工基準になった可能性について言及している。<sup>(26)</sup>いずれにせよ三河遺跡の調査として実施された屏風池の周辺では、一〇世紀前後の条里地割による溝の存在、一二世紀末葉での広域条里地割の施工の可能性、次に説明することになるが、一〇世紀以来の段階的な古墳の削平と水田開発の



状況を看取することができた。

#### (4) 古墳

中世結崎のうちにある古墳としては、島ノ山古墳や寺の前古墳、茄子塚古墳といった墳丘を今日まで地上に留めたものの以外に、すでに削平されてしまい地表からは視認できない古墳が多数、存在したようである。ここでは中世の土地利用を知る手がかりを提供した埋没古墳を掲げる。ただし佐々木塚古墳はいまに墳丘を残すが、寺川の旧流路復元の上で考慮される位置にあたるため、ここにとりあげることにした。

A 三河古墳群 三河古墳群は屏風池ならびにその東方に展開しており、現在までに五基の確認がある。いずれも埋没古墳で周濠を備えている。築造時期は埴輪を持つ五号墳以外は不詳だが、周濠内からは五世紀末から六世紀代の土器が出土しており、概ね古墳時代後期に営まれた古墳群とみてよいだろう。三河一号墳は円墳で、東西径二一・五m、南北一九・五m、幅六・七mの周濠を有する。その後に周濠を掘り込んで三基の井戸があり、うち一基からは一二世紀前半の瓦器碗が出土した。三河二号墳は方墳で、幅五mの周濠を持つ。三河三号墳は内濠が幅約七m、外濠が幅約四mの二重周濠を備えた直径約二〇mの円墳である。注目されるのは、周濠部分に同心円状に幾重にもめぐる素掘小溝が検出されたことである。<sup>(27)</sup>これは溝からの出土遺物によって一三世紀代に形成されたものとされる。つまり今日では条里型水田としてある当該地（城下郡路西一三条二里二四坪）では、少なくとも一三世紀代までは三河三号墳の墳丘が維持されており、かつ周濠の地割も遺存したことを示す。一帯の古墳の墳丘の削平が一斉になされたわけではなく、段階的にそれが進捗したことを表す資料といえる。三河四号墳も方墳で、南辺一三m、周濠幅約五mを計る。

三河五号墳は西方の屏風池の東側堤体下に検出した埋没古墳である。城下郡路西一二条二里三〇坪（小字馳上がり）に相当する。一辺七m以

上、周濠幅六mの方墳で、V期の円筒埴輪が備わる。古墳時代後期前半の築造になるものと判断される。墳丘の存在した部分にはほぼ正東西方向の幅六〇cmの小溝を検出しており、内部からは一〇世紀前後に編年される四分の三を残す黒色土器碗A類の出土があった。<sup>(28)</sup>三河五号墳は少なくともこの頃までには、墳丘の削平があり条里地割にもとづく土地利用がなされていたことがわかる。なお、さきに記したように至近の三号墳とは、墳丘の削平時節に相違がある。

B 石切山古墳 島ノ山古墳の東方からも埋没古墳の検出があった。小字石切山に該当する。条里地割の周縁にある。検出の埋没古墳は、直径四〇m以上の円墳（ないしは前方後円墳の後円部）と推定された。周濠は幅約七・七m、深さ二・五mに及ぶ。六世紀前半代の円筒埴輪、形象埴輪が周濠内から出土している。三河古墳群の諸古墳に比べて一段と規模の大きい古墳であるが、完全に削平された状態であった。周濠の埋土なかほどの粗砂層中から瓦質土器が出土したと報告されており、<sup>(29)</sup>周濠は中世後半までとりあえず痕跡を残していたことがわかる。

C 佐々木塚古墳 現・寺川の右岸に位置する。現状では、一辺三〇m、高さ一・五mの方墳状の形態となっているが、もとは直径四〇m以上の円墳あるいは前方後円墳ではないかとされる。周濠をもつ。V期のうちの比較的早い段階の円筒埴輪が多く出土した。五世紀末葉の築造とされた。<sup>(30)</sup>周囲からは弥生時代前期、古墳時代前期の遺構、遺物がみられる。北東二〇〇m程に墳長四〇mの前方後円墳が存在した可能性がある（『奈良県遺跡地図』第二分冊一九九八年所載一一A—一四）。佐々木塚古墳は現状では単独の営みだが、付近に埋没古墳が存在する可能性は高いものと思われる。寺川の旧流路は少なくともこの古墳が立地する微高地を流れたことは、古墳が遺存した現況からは考えにくい。

#### (5) 小結

考古学の成果として得られたおもな諸点とそれにもとづく若干の見解

を以下にまとめておく。

- 旧河川は五ヶ所に確認される。
- そのうちの(1)―E地点(寺川と大和川の間)に明確な砂層ベースが広範に認められる。
- (1)―E地点に確認の旧流路NR01が、付け替え以前の旧寺川と推定する。
- (1)―C地点(寺川南側) 確認の旧流路SR01は、一五世紀代以前に遡上する。付け替え後の寺川と推定する。(1)―D地点確認の旧流路は近世時期の寺川にあたる可能性がある。これらは、現・寺川に隣接しており、付け替え後の流路は現在まで基本的に踏襲、維持されている。
- 集落としては(2)伴堂東遺跡がある。複合遺跡として存在する。遺跡が立地する微高地が長く居住適地として繰り返し利用された。
- 伴堂東遺跡では一三世紀代に集落遺跡としての営みが終了し、耕地に転換する。
- 伴堂東遺跡から北西にみられる条里地割の乱れは、集落遺跡の拡がりを示す可能性が大きい。
- 耕地として(3)―A地点(寺川南側)では、三面の水田面が確認された。
- この第二水田面は条里型で一二―一三世紀に形成された。
- この第三水田面も条里型で一五―一六世紀末葉に機能した。
- (3)―B地点(寺川北側)の庵治遺跡では、条里方向の素掘小溝から一二世紀後葉の瓦器碗が出土している。
- (3)―C地点(寺川と大和川の間)でも素掘小溝から一二世紀後葉の瓦器碗が出土した。
- (3)―D地点(屏風池)からも条里方向の素掘小溝から一二世紀末葉の瓦器碗が出土した。

○ 古墳のうち(4)―Aの三河古墳群は五基からなる。後期古墳でいずれも埋没古墳である。

○ 三河三号墳では、周濠と墳丘を少なくとも一三世紀代まで遺存させている。周濠は耕地として利用される。墳丘の削平は一三世紀以降である。

○ 三河五号墳では、一〇世紀前後の条里方向の小溝が墳丘部分直下にある。削平はそれ以前にある。

○ (4)―Bの石切山古墳は、中規模の円墳とみられるが中世後半まで周濠の痕跡を留める。

○ (4)―Cの佐々木塚古墳は、現在まで墳丘を保つ。

このような考古学調査で得られた諸点から寺川に付け替え事業が存在したことは、間違いないところと考える。付近での条里型水田の形成は段階的であるが、一二世紀後葉から一三世紀代に広範化したこともまた確実なこととして理解できる。ただし、墳丘を残す古墳の存在など広域条里の施工が及ばない部分をなお含んでいる。すなわち第四章で述べるように結崎墓地が広域条里施工域の周縁となる契機がここに生じることになった。換言すると、この段階における条里施工の到達は、広域条里地割施工域と周縁の関係が、土地利用計画上の区分として明確化される方向性を含むものであった。

こういった条里施工の面的な到達段階においては、灌漑水利面の新たな整備は宮本誠氏の指摘のとおり不可避のことであったと考える。寺川付け替え事業の歴史的必然性のひとつをここに見いだすことができよう。そしてこれは耕地の再編成に留まらない可能性があることもまた調査の結果は示している。すなわち伴堂東遺跡の集落から耕地への転換は、これに一体化した事業であった可能性がある。現在の伴堂集落は西側に平行し筋違道(太子道)沿いにあるが、伴堂東遺跡の動向と関連して集落の成因と時期について追究する必要がある。



図5 寺川旧流路・油掛地蔵・結崎寺・結崎墓地周辺の地割痕跡と小字図（下図は奈良県立橿原考古学研究所編『大和国条里復原図』奈良県教育委員会 1980年による。縮尺1/10000）

- |         |         |
|---------|---------|
| A 寺ノ前古墳 | B 茄子塚古墳 |
| a イタヤカセ | b 井ウニアリ |
| c ヲノスミ  | d ヲノアテ  |

さて、寺川の付け替え時期であるが、上記の状況からみてやはり中世後半の一二世紀後葉から一三世紀中葉にあたる蓋然性が高いものと推断する。では次節で具体的に旧流路復元を試みる。

### (3) 寺川の旧流路復元

この寺川の旧流路痕跡とみられる地形を観察することができる。具体的には小字の喰田―門目、岡入―南千田、北千田―貝寄、漆塗―植木、結崎寺―分境の間にほぼ連続して認められる。北で西に約六〇〜八〇度の振幅を示す西北西―東南東の斜行地割で、長さ約一四五〇mにわたる。一部では現行水路となっている。城下郡路西一条三里と四里の北部にあたり、周辺には条里地割が展開するが乱れた状態で現存する。ここは一九九九年度試掘調査で砂層ベースの拡がりが確認された箇所であり、実際にそれを切つて旧河川(NR01など)の検出をみた。NR01からは弥生時代中期の土器が出土しているが、機能時期を出土土器の帰属時期に限定するには出土土器の数量、状態から判断して無理がある点はさきに指摘したとおりである。本稿ではこれこそ付け替え以前の寺川の旧流路そのものであると想定する。

したがって、このように寺川の旧流路を復元すると磯城郡川西町吐田は、寺川を挟んだ北側対岸の村落ということになる。今日、結崎から一面に水田が広がる情景のなかでは理解しがたいが、吐田が結崎墓地の墓郷集団に含まれず阿土墓地の墓郷集団を構成する一員となっているのは、ここに素因があると思われるのである。ひるがえるに寺川の旧流路が想定通りであるならば、結崎墓地の墓郷はこの左岸域によくまとまることになる。

なお、付け加えるに佐々木塚古墳および周辺に想定される一群も、寺川左岸域に営まれた古墳群ということになる。古墳時代後期前葉を中心に、西から(A)三宅古墳群<sup>3)</sup>、(B)三河古墳群、(C)佐々木塚古墳の一

群が寺川と飛鳥川の微高地ごとに同時期に営まれていたことになる。

### (4) 結崎寺の解体

ところで寺川の旧流路と筋違道(太子道)との交点の河岸には、結崎寺が存在したらしい。結崎寺は『川西村史』(一九七〇年刊)によると、結崎宮の神宮寺とされる。付近には結崎寺、寺前、全寺、花塚、八王寺、山堂といった寺院に起因すると思われる小字名が、東西約五〇〇m、南北約二五〇mの範囲にひろがっている。この地点は現在、川西町の水道施設ならびに健民グランドとなっている。これらの施設が建設された際の考古学調査はなく、残念ながら結崎寺の考古学上の手がかりはないとせざるを得ないが、『川西村史』は文献史料として『内山記』を所引して、結崎寺について考証する。

『内山記』には

観音堂一字

為儀法衆沙汰、自結崎辺所移渡之也、本尊則彼堂本尊也、而堂舎雖渡千堂山、仏像捨置干彼所、爰於彼本尊之所在連々有現異光、村民生奇異之思、山侶拭渴仰之涙、則山僧隨信房雖奉迎之未及安置之沙汰空過多年間、去建長五年加修理復奉返安道場、三寸十一面観音、元是鳥羽上皇御本尊也云々

とあり、結崎寺の「観音堂」が内山永久寺に移建されたことと、この本尊が鳥羽上皇の本尊であり、いったん捨置されていたが、のちに内山永久寺の僧侶の随信房が一二五三年(建長五)に修理を加えて「観音堂」に安置したという。『川西村史』はこれを退転した寺の主要部をなんらかの要因で、内山永久寺が引き取ったとする。そして、糸井神社の別当寺が「観音院」であることや、糸井神社北方の寺川右岸の字「結崎寺」などの存在から『内山記』にみえる観音堂は、退転した結崎寺にもともと存在した堂舎のひとつとみる。本稿はこの示唆深い指摘に触発された

ところが大きい。<sup>(32)</sup>『川西村史』における秋永政孝氏の指摘どおり、結崎寺に退転の事実があった蓋然性は広範囲に残る字名の存在からも高いと考える。そして、結崎寺の退転の事実と寺川の付け替えが結び付くのではないかとするものである。については、結崎寺の堂宇や仏像の移建時期にあたる一三世紀中葉までに寺川の付け替えがあったと考える。これは考古学成果とも符合する。

さらに、付け替えの推定時期からほでない一二七二年（文永九）に小字結崎寺の西側、現・寺川を挟んだ対岸の「ヲ、スイタ」、「ヲシアテ」のふたつの字名のうちの田畠が西大寺に寄進されたことが、『西大寺田園目録』にみえるのも由縁あることと思われる。この点については次節にもう一度、とりあげることにする。

墓郷形成の地域的枠組みは、この寺川の付け替え以前にすでに存在していたのではなからうか。またこういった紐帯があればこそ流路の付け替えが企図され、遂行されたのではないだろうか。直接の考古学資料はいまのところ得られていないが、寺川の付け替えは灌漑・治水の西側面からなされたものであつたらう。そればかりか、直線水路として古代道路の筋違道（太子道）を利用し、かつ上流にあつてはまた下ッ道に重複する点は、ことさらに陸路を舟運利用に改変する意図のもとになされた整備であつたとさえ思わせるものがある。言うまでもなく寺川は近世の大和川水運の基幹河川であり、今里浜における物資の集散はよく知られたところである。もちろん、陸路の整備はこれに対応してなされたことは当然のことである。では、次節にこういった視点も含めて結崎墓地の営まれた場所について考えてみたい。

#### ④ 結崎墓地の計画的配置の可能性

##### (1) 結崎墓地の周辺環境

一九八〇年代前半の調査によって明らかとなった磯城郡田原本町法貴寺遺跡は、半町四方の環濠屋敷とおそらく同様の屋敷地、寺社の区画が南北に連続して営まれた中世村落である。奈良盆地の集村化を示す典型例であり、出土遺物から集村化の時期は一三世紀後半までになされた判断できる。その後の事例増加のなかでもこの年代観は追認され、現行の編年観による限り大過ないものと思われる。北葛城郡當麻町太田遺跡、橿原市四条遺跡、磯城郡田原本町十六面・薬王寺遺跡、北葛城郡広陵町箸尾遺跡不毛田川地区などでも一三世紀後葉から末葉にかけて出現する広域条里施工域における環濠屋敷の集合体を確認することができる。盆地内においてほぼ一斉に集村化が行われたことも想定可能な状況にある。このような集村化は山川均氏や筆者<sup>(33)</sup>が主張するように河川灌漑と不可分のものとしてとらえられる。換言すると、条里制施工域の再編成の一環として集村化が計られたものといえよう。すなわち、再編成とは宅地の集合化のみならず、耕地、寺社、灌漑施設をあわせたものであり、さきの法貴寺遺跡の調査はそれがよく把握できた事例といえよう。集村化は、荘園経営の維持管理装置の再編成であり、権門・寺社（いまの場合、具体的には興福寺）、国人層・有力名主層および中間層、さらに下位の各階層の人々においても、対応しなければならぬ事態であつたに違いない。については周到に準備され、広域な計画性をあらかじめ具備したものであつたとみられる。なかにこういった変革に組み入れられた中世墓地があるのではないかとするのが、本節の主張である。いったい、現在の郷墓のうちに計画的配置されたものがあるのか。

結崎墓地は城下郡路西一二条四里内にある。現在、小字別所を中心に





図6 結崎墓地（直上 写真上方が北 2000年1月19日撮影）

小字三途川、寺ノ前に墓地が広がっている。むろん、当初の営みなどの範囲に及んでいたかは発掘調査が行われていない現段階では不明だと言わざるをえないが、南には墓地に隣接して茄子塚と称される方墳が存在しており、東側の三途川とともに墓地に起因したとみられる坪固有名を有する。<sup>(35)</sup>このことからみて、その名が発生する段階には墓地化しており、範囲はこのうちに収束するものと推測される。大和の広域条里地割との関係を見ると、東側の小字三途川は一二条四里のうち二一坪に相当する。小字の四至は坪境界に一致しており、この部分については正方位を示す地割の施工が及んでいたことがわかる。その西側は道になっていて、現在の結崎墓地を南北に貫く道となる。

さて、現在の結崎墓地は東限が小字三途川・茄子塚の坪内にあり、南はほぼ正方位の境界となっている。つまり大和の広域条里地割に規制された墓地範囲の設定がなされたといえる。しかしながら、墓地の北、西は条里地割に即した状況とはいえない。すなわち結崎墓地は正方位をなす現行の磯城郡条里地割施工域の周縁に営まれたものといえる。このことは、別所の南から三宅町寺の前古墳の外堤を利用して西方の飛鳥川の流路に至る請堤が存在するが、当該地が寺川の氾濫から耕地や村落を防禦する要衝であったことも関係することだろう。結崎墓地の西方域、請堤の北側は磯城郡内でも条里地割が乱れた一帯としてある。このような状況は寺川の灌漑域とも関係したものであり、前節で指摘した寺川の付け替え時ないしは、それ以降に生じたものであると考える。

結崎墓地の配置と条里制施工域の再編成、すなわち条里制地割施工域の周縁に墓地が位置することに関連性があるのではないか、まずこれが第一点である。そしてさらに広域条里地割施工域の周縁が生み出されたことと、寺川の付け替え事業に関連性があるのではないかとするのが第二点である。

(2) 結崎墓地の南北軸

第三点の指摘の前に、結崎墓地の位置についても少しひろく周辺からみておきたい。結崎墓地から北行するには、寺川を越えることになる。ひとつは、西行したのち唐院をぬけてまっすぐ北行して吐田橋をわたる(Aルート)。いまひとつは、結崎墓地からまっすぐに北行して梅戸を通り過ぎて梅戸橋をわたる(Bルート)。もちろん、いったん東行して宮前橋をわたり、北行することもできる(Cルート)。さらに北行すると大和川を越えることになるが、いずれのルートをたどるにせよ渡河点は板屋ヶ瀬橋(現在の橋より西へ二三〇mの下流にあったとされる)しかなく、この橋をめざすことになる。安堵町の中蔵氏の江戸期の「久保田村之絵図」<sup>(36)</sup>、「和州平群郡窪田村絵図」をみると、吐田橋を越えてすぐに東行して梅戸橋を通る南北路にあたり、直角に北へ折れて板屋ヶ瀬橋に至る道が描かれている。この絵図では、梅戸橋は描かれていない。もっとも一九〇八年

(明治四一) 測図の「正式地形図」(縮尺二万分の一)には、上流の吐田橋(Aルート)下街道、下流の宮前橋(Cルート)とともに梅戸橋(Bルート)後掲の条里軸線上の南北路。現在の橋は東西



図7 油掛地藏(南から 2003年7月6日筆者撮影)

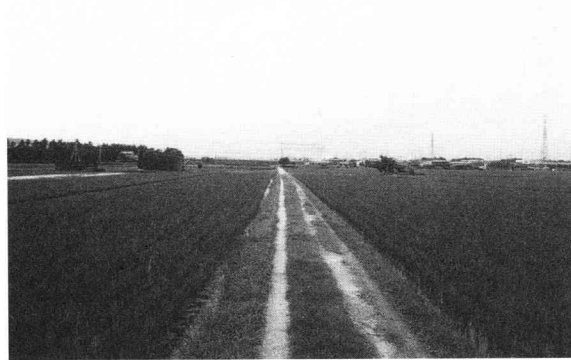


図8 結崎墓地から板屋ヶ瀬橋への南北路(南から 奥に油掛地藏 2003年7月6日筆者撮影)  
—本文中のBルート—



図9 板屋ヶ瀬橋から結崎墓地への南北路(北から 奥に島の山古墳 2003年7月6日筆者撮影)  
—本文中のBルート—

方向に架かるが、「正式地形図」では南北路に対して架けられていたことがわかる)の存在がある。

近世、近代の道が、本稿で問題とする中世後半期の交通路に直結するものかどうか、軽々に判断することはできないが、とくにBルートの梅戸橋は寺川旧流路と筋違道(太子道)の交点にあり、もとは結崎寺の推定所在地にかかる点は看過できない。さらに北行すると、瘡の治癒の結願に際して油を塗る習慣があったという油掛地藏を安置する小堂が、路傍に西面して設けられている。ここは城下郡路西一〇条三里二六坪に相当する。幸いにも油掛地藏には、一五二三年(大永三)の銘が刻まれている<sup>(37)</sup>。原位置がほぼ保たれたものとみてよいならば、結崎墓地からまっすぐに北行するBルートの営みの下限を一六世紀前半におくことは認められよう。

板屋ヶ瀬橋をわたり板東、さらにまっすぐ北行すると小字アドノマエ



図10 旧板屋ヶ瀬橋付近（南から 手前は川西町吐田  
向こうは安堵町窪田 2003年7月6日筆者撮影）

から前節に少しふれた生駒郡安堵町阿土墓地に至るのである。道は阿土墓地の中央を南北に貫く。現在の阿土墓地は東安堵、西安堵、窪田、岡崎、吐田（川西町）、下永（一部、川西町）椎木（一部、大和郡山市）の七ヶ大字の郷墓である。墓寺の阿土寺は律宗寺院である。結崎墓地の中心にある安養院は周囲より一段と高く、古墳墳丘である可能性が指摘されている<sup>(38)</sup>。寺ノ前古墳、茄子塚古墳に挟まれた位置にあり、それを肯定的にとらえてよいと考えるが、この阿土墓地も墓の間古墳群と重複して存在しており、今日、石塔が林立する墳丘は小規模な古墳である可能性が高い<sup>(39)</sup>。結崎墓地、阿土墓地ともに古墳の墳丘を共同墓地として再利用したことになる。古墳の再利用については、中世後半期の新たな宗教運動にもなつて展開したことを以前に述べたところである。これは奈良盆地の場合、おもに律宗系集団、あるいはそれに先駆する宗教者たち（プロト律宗系集団と呼称したことがある）によつてもたらされたものとした<sup>(40)</sup>。ここに挙げた結崎墓地、阿土墓地もそういった宗教行為に関連した蓋然性は高いが、もうひとつの側面として上述したように条里地割の及ばない、かつ古墳の墳丘を残したままであつて古代、中世前半期の開発により耕地化、宅地化したものとはみえない、いわば生産域外にあつたという経済的側面も見過<sup>(41)</sup>せない。結崎墓地西方の寺の前古墳は現在、外堤が請堤

から前節に少しふれた生駒郡安堵町阿土墓地に至るのである。道は阿土墓地の中央を南北に貫く。現在の阿土墓地は東安堵、西安堵、窪田、岡崎、吐田（川西町）、下永（一部、川西町）椎木（一部、大和郡山市）の七ヶ大字の郷墓である。墓寺の阿土寺は律宗寺院である。結崎墓地の中心にある安養院は周囲より一段と高く、古墳墳丘である可能性が指摘されている<sup>(38)</sup>。寺ノ前古墳、茄子塚古墳に挟まれた位置にあり、それを肯定的にとらえてよいと考えるが、この阿土墓地も墓の間古墳群と重複して存在しており、今日、石塔が林立する墳丘は小規模な古墳である可能性が高い<sup>(39)</sup>。結崎墓地、阿土墓地ともに古墳の墳丘を共同墓地として再利用したことになる。古墳の再利用については、中世後半期の新たな宗教運動にもなつて展開したことを以前に述べたところである。これは奈良盆地の場合、おもに律宗系集団、あるいはそれに先駆する宗教者たち（プロト律宗系集団と呼称したことがある）によつてもたらされたものとした<sup>(40)</sup>。ここに挙げた結崎墓地、阿土墓地もそういった宗教行為に関連した蓋然性は高いが、もうひとつの側面として上述したように条里地割の及ばない、かつ古墳の墳丘を残したままであつて古代、中世前半期の開発により耕地化、宅地化したものとはみえない、いわば生産域外にあつたという経済的側面も見過<sup>(41)</sup>せない。結崎墓地西方の寺の前古墳は現在、外堤が請堤



図11 阿土墓地（直上 写真上方が北 2000年2月16日撮影）





図12 結崎墓地周辺南北路と各施設の配置関係図（下図は清水靖夫・小林茂

『正式二万分一地形図集成』柏書房 2001年による。縮尺1/20000）

- |        |         |          |         |        |         |
|--------|---------|----------|---------|--------|---------|
| 1. 良福寺 | 2. 阿土墓地 | 3. 板屋ヶ瀬橋 | 4. 油掛地蔵 | 5. 結崎寺 | 6. 結崎墓地 |
| A. 吐田橋 | B. 梅戸橋  | C. 宮前橋   |         |        |         |

に、周濠部分が水田となるが墳丘、盾形周濠とよく保持されたものと見受けられる。また茄子塚古墳の墳丘上は畠となるが、墳丘自体が大きく変形されたものとは思われない。

一帯では三河古墳群をはじめとして、一〇世紀前後から墳丘を削平して条里地割に即しての耕地化が進行することが判明しつつある。実際の発掘調査においては、いわゆる埋没古墳（奈良盆地の場合は、洪水砂の下位に埋まったり、火山活動により文字通り埋没したものではなく、人為的に削平されたものがほとんどである。したがって、古墳周濠部分はその存在を知る手がかりとなる）として把握されるが、結崎墓地周辺の古墳、また阿土墓地の墓の間古墳群は、こういった開発を免れた、あるいはむしろ取り残された例として認識しておきたい。

阿土墓地を通過してほぼまっすぐ北行すると、大和郡山市西町に至る。ここにはかつて良福寺が存在した。西町北辺にあつたらしく、小字「堂田」、「堂」は寺に因んだものと推測されている。良福寺には文殊騎獅像が安置されていた。『安堵町史』（一九九三年刊）によれば、文殊会には大和川の対岸の吐田あたりからの参詣もあつたというが、板屋ヶ瀬橋を通り、大和川をはさんだ南北軸が信仰上の道としても機能していたことを感じさせる。さらに先年、文殊騎獅像の像内に納入された文殊菩薩印仏の存在が明らかにされた。印仏は六七一枚あり、それぞれ数十枚から百数十枚を一綴りにしたものが十組分にまとめられていた。最後の紙の裏面に結縁者集団の地域を示すとみられている地名が記されている。わけでも「大路堂九三人、常陸」の名を記したものが含まれていた。<sup>(42)</sup>

大路堂は「忌部莊差図」（二四九七年—明応六—）に「大路堂里」と表記された横大路至近の地名とされ、現在の橿原市曾我町にあたる。より細かくみると、横大路に面して「大路」、「辻堂」の記述がある。より広域に南北関係で結ばれる文殊信仰の形成があつたことを知ることができ。付け加えるに「大路堂」は、『感身学正記』寛元元年（一二四三）

二月二五日条に叡尊が、当宿等四箇宿の文殊供養（四ヶ宿惣供養）を催行した場の「大路堂市庭」に関係するものとみられている。このうちの当宿と称しているのは額田部宿のことで、額安寺の西辺に位置した。

溯つては、仁治元年（一二四〇）に忍性が文殊尊像の図絵を安置したのもこの額田部宿である。さきほどの良福寺の文殊信仰の存在と無関係とは思われないのである。さらに文殊騎獅像の作者が、鈴木喜博氏の研究により一三世紀前半に南都で活躍する善派仏師のひとり善円とみられている点も造像背景に律宗の活動との関係性をつよく示す事項として理解される。<sup>(43)</sup>

板屋ヶ瀬橋を通る南北路の形成が、上記の文殊信仰の顕在した一三世紀前半代となれば、前節の寺川の付け替え時期と符合するが、現在のところ確実な資料を得るに至っていない。水陸双方の交通路の整備が一体のものとしてなされた可能性を前節に言及したが、そのような観点からは寺川の付け替えと、南北路の形成は不可分の事業であつたといえ、いま強弁するに無理がある。それと言うのも、この南北路は小字結崎寺の西面を通っており、仮に寺川の付け替え以前に川を渡るとしても、やはりここが渡河点となつていたことと思われる。その意味では、以前より南北路が存在した可能性がある。

### （3）律宗系集団の活動

ただし、寺川の付け替えに先行するにせよ、付け替え時点であるにせよこの一帯が一三世紀前半の律宗系集団の活動初期から拠点となつた点は看過することはできない。板屋ヶ瀬橋では橋勧進があり、それに律宗寺院である額安寺の関与があつたことが一三四七年の『嘉元記』貞和三年三月五日条にみえる。すなわち「板屋ヶ瀬ノ橋并地藏堂供養、於額安寺舞楽供養存之、奈良舞人走物皆見舞也」とある。さらに『法花寺田畠本券』（二四〇六年—応永一三—）には、城下郡西郷九条一里一九坪、



三一坪がそれぞれでている。「イタヤカセ」のうちの田畠が法華寺に寄進されたことになる。一九坪は現小字「板屋」、三一坪は「平ノ前」に相当しており、問題としている南北路（城下郡路西一〇条三里の東から五丁の坪境ライン）を丁度、中央に挟むことになる。またこれは、一五二四年の「衛門四郎他八人畠作職売券」大永四年二月一三日に

合七反者、字吐田領ノ内イタヤハタケハシツメヨリ東エ十一段目ニ在之、本地子阿土ノ寺エ四斗代アリ

とあり、衛門四郎他八人が畠七反を売却した土地の本地子を阿土寺へ四斗、納めることを明記している。阿土寺の権益が大和川の対岸の吐田の板屋ヶ瀬橋の橋詰めに及んでいたことを示す。板屋ヶ瀬橋の経営に額安寺、法華寺、阿土寺からなるいずれも律宗系寺院が関係したことは、間違いないところである。橋の維持、管理は当然ながらその水運、陸運といった交通、流通への関与をとまなうものであったことは、想像に難くない。

南下することになるが、『西大寺田園目録』には、一二七二年（文永九）に結崎寺の西側の城下郡路西一一条四里二七坪に該当する「ヲ、スイタ」の一反分が寄進されたことがみえる。ここは川西町梅戸のうちにあり小字「大水田」として中世以来の字名を留める。同じく西北に隣接する坪にあたる三五坪の「ヲシアテ」の一反も寄進された土地としてでている。ここも小字「柏手」として今日に名を留めている。「ヲ、スイタ」と「ヲシアテ」は現・寺川左岸に接した坪固有名であり、対岸には結崎寺が存在した。そして問題とする南北路（城下郡路西一一条四里のうち東から五丁の坪境ライン）は両方の間を通る。ここは寺川の渡河点のひとつでもある。さきほどの板屋ヶ瀬橋と同様の位置にあたるところが、一三世紀後半に西大寺に寄進されたことになる。これも律宗の活動が基底にあったことを物語る史料といえよう。

付加するに、さきほどの油掛地蔵の立つ城下郡路西一〇条三里二六坪

も『西大寺田園目録』に一反分（西より三段め）の寄進がみえる。ここは「井ウニアリ」と記されており、現小字「湯」に名を留める。寄進されたのは、一二九五年（永仁三）のことであるから、油掛地蔵の年紀を大幅に溯ることになるが、地蔵の存在の前提にこの寄進行為が関連している可能性も無稽とはいえないだろう。

#### （4）結崎墓地の計画性

ここまで述べた箇所条条里の里内での東西位置を整理して示すと、(A)良福寺は、平群郡九条四里の東から西へ五丁のライン上の付近にある。(B)阿土墓地は、平群郡一〇条四里の東から五丁のライン上の付近にある。(C)板屋ヶ瀬橋はその真南にある。油掛地蔵もそのほぼ真南の城下郡路西一〇条三里の東から五丁にある。(D)もとの結崎寺、すなわち梅戸橋もその真南の城下郡路西一一条四里の東から五丁にある。そして、(E)結崎墓地は広域条里地割の周縁にあつて、城下郡一二条四里にある。条里制に則ると、二八坪と三三坪相当の位置に別所があり、律宗寺院の墓寺、安養院が営まれている。ここはまた一二条三里と四里の里界からは東から西へ五丁のライン上にあたる。すなわち、(A)～(E)のそれぞれの箇所がほぼ正南北関係の一直線上に配置されていることになる。付加するに墓地の西域の別所寺には天文一九（一五五〇）年銘の地蔵石仏、永禄一〇（一五六七）年の「道泉」銘背光形五輪塔、天正五（一五七七）年の「妙林」銘背光形五輪塔があり、結崎墓地において石塔を立てることが、少なくとも近世以前の一六世紀後葉にあつたことがわかる。

第三点として指摘できることは、結崎墓地の墓郷をはるかに越えてつづく正南北軸があり、結崎墓地の位置はこの軸線上にある。これは条里地割の坪境に重複したものであり、南北を往来する際の交通の要所（寺川、大和川のふたつの渡河点）を含んだ道となっている。しかも律宗の活動の軌跡が色濃く反映している。文字通り教線の確保を担った軸線と

しての理解もできるのである。これを第四点としておこう。

第一点から第三点をまとめると、中世後半期の結崎墓地の位置は、中世結崎の共同墓地を設けるといふ個別単独の課題としてあり、決定されたものではなく、広域な土地用途の吟味、選択のなかで周到な計画性をもって配置された可能性が高いことを指摘する次第である。

## おわりに

中世結崎の範囲<sup>(44)</sup>と現行の結崎墓地の墓郷に地域的な重なりが認められ、その地域的枠組みの形成が一二世紀後葉以前にも遡上する蓋然性が高いことを、おもに近年の考古学成果を用いて述べた。この地域的枠組みの主体者は、墓郷集団の先駆けともいふべき集団とみなされよう。従来の墓郷の形成時期に対する理解からは、その前提を模索したものとはいえず、時期的にひととき古く位置づけたものとなった。なお、郷墓経営の実態面や維持する集団の階層性といった側面において共通性を認めることができるものかどうか、近世、近代の変容がどのようにあつたものかは本稿がなし得なかったところである。

また、集団が関与した行為として寺川の付け替え事業をその象徴的なものとして提起した。寺川の付け替えの事実、これも周辺における考古学成果からほぼ確実視される。もともと考古学調査は寺川の流域全体からみれば、部分的な確認に留まっている。旧寺川の流路復元はなお課題としてある。付け替え時期についても一二世紀後葉から一二世紀中葉とする年代観を示したが、直接に旧寺川の流路内出土遺物によるものではなく、将来、旧流路想定部分の調査において機能時期の確定を計る必要がある。

中世墓地そのものの調査資料の検討も必要である。実は現在の結崎墓地の墓郷範囲に含まれる田原本町黒田の黒田大塚古墳第一次発掘調査地

では、古墳の周濠にかかる部分で二基の中世墓が検出されている<sup>(45)</sup>。ここはまた法楽寺の寺域内にあたっている。古墳が中世墓地に再利用されたことを示した資料といえるが、結崎墓地との関係性をどのように解くかは課題である。上述の内容とも関係するが、結崎墓地それ自体の初源はいまのところ不明とせざるを得ない。結崎墓地の石塔に対する悉皆調査などは実施されておらず墓地そのものの分析は、本稿においてもほとんど扱えていない。ただ墓地内の石造物の紀年銘から一六世紀後半代には少なくとも墓地としての利用が類推されるほどであつて、それ以前については明らかにし得ない。また郷墓となる以前からの共同墓地であるのか、特定の有力者の墓地としてあつたものかという点についても現状の資料からは明らかにすることはできていない<sup>(46)</sup>。

もうひとつ本稿で述べた点で従来、ほとんど触れられていないと思われる点は墓地の計画的配置についてである。もちろん郷墓の形成過程に多様性を認める立場からすると、すべての郷墓が計画的に配置されたことを主張するものではない。斑鳩・極楽寺墓地と結崎墓地は、ともに広範な墓郷からなるが、墓郷形成に至る歴史過程に該当地域においての律宗系集団の関与・活動が存在したと推される。この共通項が認められる一方、墓地となる契機に土地用途上の計画性が指摘できるか否かという点は、双方において異なるものであつたと推測される。つまり今回とりあげた結崎墓地や阿土墓地は広域条里施工域のなかの周縁にあたる。この「周縁」と「灌漑施設の充実・広域の条里型水田の形成」とは、表裏の関係にあるものとしてとらえられる。条里制施工域における再編成は耕地（これには灌漑諸施設としての水路はもちろん池や溜井、井戸、ことによると結崎地域では請堤の設置といったことも考慮しておかなくてはならない）に留まるものではなく、集落にも及ぶことはすでに述べたところである（伴堂東遺跡の移転の可能性に言及した）。さらに既存の古墳に対する新たな利用（耕地への転換、中世墓地としての再利用）や

交通路の整備（水運交通路としての「筋違道」の利用、板屋ヶ瀬橋を通る南北陸路の存在についてふれた）などもこれに含まれるものと理解するならば、当然、墓地の計画的配置もこのなかに置いてよいだろう。一般的な土地利用の再編成が一二世紀後葉から一三世紀中葉にかけての中世結崎に展開したと考えるのである。

もはや考古学の分野のみで取り組める域を超えた課題といえよう。不案内ながら本稿では、あえて歴史地理学の成果や文献史料、民俗事例にも依拠して中世結崎と結崎墓地の墓郷集団の前提となる地域の枠組みの形成時期、実態に迫ろうとした。各分野からの闊達な意見交換が喚起されることを期待してひとまず稿を閉じることとする。

#### 【謝辞】

本稿をなすにあたっては、以下の方々から多くのご教示、ご便宜をたまわった。文末ながらここに記して感謝の意を表したい。

青木勘時・稲城信子・大宮守人・大宮守友・小池香津江・佐々木好直・佐藤聖・白石太一郎・千田嘉博・土居規美・中井美知子・橋本紀美・幡鎌一弘・坂靖・藤田三郎・福田哲也・三村由里香・村木二郎・本村充保・門田誠一・山上豊・山川均・山田隆文・吉井敏幸・吉田栄治郎・米川裕治

#### 註

- (1) 野崎清孝「奈良盆地における歴史的地域に関する一問題―墓郷集団をめぐる―」『人文地理』第二五巻一号、一九七三年。
- (2) 今尾文昭「斑鳩・極楽寺墓地と仏塚古墳墓室の再利用―郷墓形成過程の一形態―」『近畿地方における中・近世墓地の基礎的研究』国立歴史民俗博物館、二〇〇一年。
- (3) 細川涼一「中世の法隆寺と寺辺民衆―勸進聖・三昧聖・刑吏―」『部落問題研究』七六輯、一九八三年初出、のち『中世の身分制と非人』日本エディタースクール出版部、一九九四年に所収。
- (4) 千田嘉博「惣墓理解のための基礎的前提―『近畿地方における中・近世墓地の基礎的研究』国立歴史民俗博物館、二〇〇一年。

坂本亮太「惣墓からみる中世村落―「惣」と惣墓との関連を中心に―」『ヒストリア』第一八二号、二〇〇二年。

- (5) 幡鎌一弘「中山念仏寺墓地の墓郷と歴史的環境―『多聞院日記』を中心に―」『近畿地方における中・近世墓地の基礎的研究』国立歴史民俗博物館、二〇〇一年。

- (6) 青木勘時「長岳寺旧境内地遺跡発掘調査概要報告」『平成十年度奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会、一九九九年。

- (7) 安堵町史編纂委員会『安堵町史』本編、一九九三年。

- (8) 「ゆうざき」の項、『角川地名大辞典二九 奈良県』角川書店、一九九〇年。

- (9) 前掲書（7）に同じ。

- (10) 秋山日出雄「奈良制地割の施行起源―大和南部条里の復原を手掛かりとして―」『日本古文化論攷』橿原考古学研究所、一九七〇年。

- (11) 秋山日出雄「大和（飛鳥川）の歴史地理学的研究―弘仁・天長期の大和南部水利政策―」『歴史地理研究と都市研究』上、一九七八年。

- (12) 中井一夫「奈良盆地における旧地形の復原―弥生文化の展開の研究に対する基礎作業 その一―」『関西大学考古学研究室開設三〇周年記念 考古学論叢』一九八三年。

- (13) 宮本誠「奈良盆地の水と土」『農山漁村文化協会』、一九九四年。

- (14) 松浦茂樹「古代大和盆地における開発と河川処理」『水利科学』一五一、一九八三年。

- (15) 松本洋明「十六面・薬王寺遺跡」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第五四冊、奈良県立橿原考古学研究所、一九八八年によると検出の旧河川は初瀬川水系と寺川水系の合流をします砂礫組成で、初瀬川が扇状に分流していた可能性を説く。

- (16) 本村充保「京奈和道試掘―京奈和道「大和区間」建設に伴う平成六年度試掘調査報告―」『奈良県遺跡調査概報一九九四年度（第一分冊）』奈良県立橿原考古学研究所、一九九五年。

- (17) 坂靖・名倉聡「伴堂東遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報一九九五年度（第一分冊）』奈良県立橿原考古学研究所、一九九六年。

- (18) 坂靖「伴堂東遺跡第二次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報一九九九年度（第二分冊）』奈良県立橿原考古学研究所、二〇〇〇年。

- (19) 山田隆文「三河遺跡第三次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報一九九八年度（第二分冊）』奈良県立橿原考古学研究所、一九九九年。

- (20) 小山浩和「京奈和自動車道建設予定地内「天理市庵治地区」試掘調査概報」『奈

良県遺跡調査概報一九九九年（第一分冊）『奈良県立橿原考古学研究所、二〇〇〇年。

- (19) 前掲書(18)に同じ。
  - (20) 前掲書(16)に同じ。
  - (21) 仲富美子「伴堂シリエタ遺跡発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報一九九二年（第一分冊）』奈良県立橿原考古学研究所、一九九三年。
  - (22) 前掲書(17)に同じ。
  - (23) 米川裕治「庵治遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報二〇〇〇年度（第二分冊）』奈良県立橿原考古学研究所、二〇〇一年。
  - (24) 前掲書(18)に同じ。
  - (25) 今尾文昭「三河遺跡第四次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報一九九九年（第二分冊）』奈良県立橿原考古学研究所、二〇〇〇年。
  - (26) 坂靖「三河遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報一九九五年（第一分冊）』奈良県立橿原考古学研究所、一九九六年。
  - (27) 青木香津江「三河遺跡第二次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報一九九六年（第一分冊）』奈良県立橿原考古学研究所、一九九七年。
  - (28) 前掲書(25)に同じ。
  - (29) 本村充保「石切山古墳発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報一九九六年度（第一分冊）』奈良県立橿原考古学研究所、一九九七年。
  - (30) 坂靖「佐々木塚古墳・出屋敷遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報一九九七年度（第一分冊）』奈良県立橿原考古学研究所、一九九〇年。
  - (31) 伊達宗泰「倭屯倉地帯の古墳群」『古代学研究』第五九号、一九九一年では「三宅古墳群」と総称し、付近の古墳の現況についてまとめられている。先述の佐々木塚古墳の西北の前方後円墳の存在もこれに指摘がある。
- その後、伊達宗泰「古墳群設定への一試案」『橿原考古学研究所論集』吉川弘文館、一九七五年初出、のち『日本古代文化圏の形成と伝播』学生社、一九九一年所収では、各水支配地域ごとに古墳築造の集団を抽出する。初瀬川・寺川水支配地域のそれを「おやまと古墳集団」と定義している。そのなかで「三宅古墳群」の呼称を示されている。筆者は伊達氏の呼称を適当と認め踏襲する。
- (32) 秋永政孝「中世」『川西村史』川西村教育委員会、一九七〇年。なお、同書に所引の『内山記』には、ほぼ同内容の東京国立博物館蔵と天理図書館蔵保井文庫所蔵の二種がみえる。本稿では所引の東京国立博物館蔵本の内容を掲げた。
  - (33) 山川均「条里制と村落」『歴史評論』第五三八号、一九九五年。
  - 山川均「中世集落の論理」『考古学研究』第一七八号、一九九八年。
  - 山川均「中世集落と耕地開発」『中世集落と灌漑』大和古中近研究会研究資料

Ⅲ、一九九九年。

- 山川均「開発・溜池・環濠」『戦国時代の考古学』高志書院、二〇〇三年。
- (34) 今尾文昭「法貴寺遺跡」『季刊自然と文化―特集中世の居館―』観光資源保護財団、一九九〇年。今尾文昭「灌漑と環濠屋敷」『中世集落と灌漑』大和古中近研究会研究資料Ⅲ、一九九九年。
- (35) 稲城信子「墓郷地域における民俗調査」『盆行事』を中心に「近畿における中世葬送墓制の研究調査概報」(財)元興寺文化財研究所、一九八四年は葬送墓制習俗の研究対象として天理市中山および磯城郡田原本町大安寺の墓郷集団をあげるが、そのうち北阪手の盆行事の種々の供物にナスがある。ナスを供物とするのは、一般的な行為と思われる。結崎墓地の南の入り口に所在の古墳に「茄子塚」の名が付けられたのもこういった仏事に由来していることと推測する。
- (36) 大宮守人「大和川水辺の民俗―川・舟・くらし―」平成九年度特別テーマ展図録、奈良県立民俗博物館、一九九七年掲載図版による。
- (37) 松本俊吉「寺院」『川西村史』川西村教育委員会、一九七〇年。
- (38) 前掲書(31)には、安養院の西面・北面に周濠痕跡と見られる池（現在は埋没が観察されている。主軸を東西におく墳長約五〇mの前方後円墳とする。
- (39) 服部伊久男「国宝額田寺伽藍井条里図にみえる墓について」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズV、一九九二年。
- (40) 今尾文昭「観尊、忍性・律宗系集団と大和の遺跡」『観尊・忍性と律宗系集団』同シンポジウム実行委員会、二〇〇〇年。
- (41) 政岡伸洋「奈良盆地における墓郷と墓制―大和郡山市伝宝墓の事例から―」『鷹陵史学』第二五号、一九九九年は同様の見解を示す。
- (42) 鈴木喜博「大和郡山・良福寺文殊菩薩騎獅像と像内納入の文殊菩薩印仏について」『仏教藝術』一九九号
- (43) 鈴木喜博「観尊と善派仏師 善円から善慶へ―薬師寺と西興寺の地藏菩薩像を中心に―」『観尊・忍性と律宗系集団』同シンポジウム実行委員会、二〇〇〇年。
- (44) 考古学の立場から、たとえば土器の生産・流通・消費といった側面から地域の抽出をはかる方法がある。奈良盆地においても在地性のよい土師皿などを用いることは、小地域を理解する上で有効であろう。大和型瓦器碗や大和型瓦質播鉢の生産、流通にも一定の地域性が存在した可能性があるが、墓郷集団の単位の設定に応用できるかどうかは土器研究の水準もさることながら、現状の資料では難易である。しかし今後の研究のなか本稿で問題とした中世のさまざまな地域集団と考古資料の関連性が視野にいれられることを期待する。
- (45) 藤田三郎「黒田大塚古墳第一次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要

二」田原本町教育委員会、一九八四年。

(46) 石塔の林立する現在の郷墓の景観形成がいつ頃であるかについて本稿では、取り組めなかった。白石太一郎「もう一つの世界―人々は墓地をどのように営んだか―」『日本列島に生きた人たち9 民具と民俗下』岩波書店、二〇〇〇年でとりあげられた郷墓の形成原理や葬送観念の変質といった課題も多くの郷墓に対する石塔の悉皆調査や本稿で問題とした地域的枠組みの追究を手掛かりに明らかにすることが出来ると思う。

(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、  
国立歴史民俗博物館共同研究員)

(二〇〇三年六月九日受理、二〇〇三年六月二十六日審査終了)



## **Preconditions for the Formation of Graveyard Villages: around the Yuzaki Graveyard in Yamato**

IMAO Fumiaki

It is often pointed out the local graveyards in the Nara basin can be traced back to graveyards from before the Early Modern period. The running of a local graveyard was carried out by the several villages that formed a graveyard village, and this framework is explained in relation to water villages, mountain villages and shrine village and also villages in the entire province (国人郷). However, there are many instances in which this kind of regional and historical framework does not correspond with the actual facts. There are diverse circumstances at play in the process of the formation of an actual graveyard village, and it is these which cause its formation. When examining the individual preconditions and process of the formation of graveyard villages, the present challenge is to provide classifications for future use.

As one example, I turned my attention to the Yuzaki graveyard, in Kawanishi-machi, Shikigun situated more or less in the center of the Nara basin. The village around Yuzaki graveyard extends over a wide area on both sides of the Terakawa River and is also the largest size for a village even for Yamato. First, using historical materials I endeavored to restore Yuzaki's scope to what it had been in the second half of the Medieval period, which turned out to be virtually a replication of the scope of the village today. Namely, it indicated the possibility that the regional framework of the village group had existed before the second half of the 13th century. Next, I refer to the rerouting of the Terakawa River as an historical project that illustrates the actual conditions of this regional framework. Near Yuzaki, Terakawa River becomes a straight waterway that runs along an ancient road called the SUJICHIGAI-do (Taishi-do). Archeological investigations in recent years have detected a river course that can be concluded to be the former waterway, and the former waterway has been restored from observations of its present topography. Using historical materials as well, it is estimated that the rerouting of the waterway took place from the latter part of the 12th century through to the middle of the 13th century. It is suspected that the rerouting of the Terakawa River was for a deliberate reorganization of flood control, irrigation, arable land and transportation, though it is not difficult to imagine that it also brought change to basic facilities in the region. Of course, the groups that should be called the forerunners of the village were caught up in all this.

Next, I examined the geographical position of Yuzaki graveyard. 1) It was on the rim of a large area of land in Yamato that was systematically divided. 2) The emergence of a rim of the

---

---

large area of land that was systematically divided is related to rerouting of the Terakawa River. 3) Strategic religious and transport facilities can be found along an axis that runs in a north to south direction through the Yuzaki graveyard (equivalent to the border of the systematically divided land in Shiki-gun and Heguri-gun). In other words, when facing north one finds the strategically located sequence of the Yuzaki graveyard, Umedo bridge (formerly Yuzaki Temple and a crossing point over the Terakawa River), Itayagase bridge (a crossing point over the Yamato River, ADO graveyard and then Ryofuku-ji temple. 4) Historical materials reveal that these were bases for the activities of the Ritsu Sect.

In summation, we may conclude the following. The regional framework for the village around Yuzaki graveyard was formed in the 13th century, it is possible that the village was intentionally located around the graveyard, it is possible that this option was taken amid investigations into land use that looked at a large area that exceeded the bounds of the village, and that the activities of the Ritsu Sect contributed to the process of formation of the village around the Yuzaki graveyard.